

8時30分にホテルをチェックアウトして出発です。今日もコンケン大学のビタヤ先生と学生さんたちが同行してくれました。9時にコンケン市内のカンボーン村に到着し、まず村長さんからお話をうかがいました。カンボーン村は570人158戸の村で、村民の半数以上が農業を営んでいます。残りの人は労働者や都市へ働きに出たり、村のゴミ集積所で働いたりしているそうです。

主な産業は食用コオロギ飼育、酪農、肉牛の肥育、キャッサバやゴム等栽培です。農業は天気に頼っていますが、一部は井戸の水を村にある大きな配水タンクに汲み上げ各農家で分け合っているというそうです。電気に関しては付近の2市から電線が引かれていて、どの家にも電気は通っているそうです。村の説明を受けた後、食用コオロギの飼育場を見せてもらいました。コンクリートの水槽のようなところに卵パックのようなもので巣をつくり、産卵用に土を敷いた容器も置かれていました。コオロギが産卵するとその卵は紙製の弁当箱のようなものに移され15日間置かれます。この箱は保温することにより孵卵器の役割を果たすそうです。その後45日間肥育され、大きくなると出荷されます。食用コオロギには黒いものと白いものの2種類があり、黒いコオロギの方が高いけれど美味しく人気があるそうです。コオロギは主に素揚げにして甘辛煮のような味を付け食べますが、生で食べる場合もあるそうです。味のついたコオロギを食べさせてもらいましたが、羽や足の食感がまるでエビのようで、口に入れてしまえばそれほど異質な感じはしませんでした。



コオロギの飼育場

次に酪農家を訪問しました。この農場には、現在子牛を含めて全部で20頭飼育しており、うち搾乳牛は8頭いて、搾乳は午前5時と午後4時の二回行われているとのことでした。元々ここには最大で59頭の牛を飼育していましたが、農場主の高齢化に従って、管理が困難になり、現在は飼養頭数を減らしたとの説明を受けました。

搾乳での日本との違いは、まずは搾乳前に地下水で体全体を洗うこと、そして乳頭へのディッピングなどの消毒作業は行われていないということです。一方ミルクカーなどの搾乳機械はしっかり消毒されており、衛生管理の概念はあるようですが、日本ほど厳しくないという印象を受けました。乳価は1Lで17バーツほどで1頭当たりの平均乳量は14L、8頭の牛から搾乳し、一日当たりの収入は約2000バーツとなり、ご主人のお話では、ゴムの木やコオロギの育成などの他の選択肢と比べても、こちらの方が収入が良いとの事です。



酪農家での搾乳の説明

牛に与える飼料としては、主に配合飼料と、農場の草地から草を与えているそうです。配合飼料の成分は、大豆粕、米糠、

キャッサバやココナツ，アブラヤシの絞り粕，大豆残渣を発酵させた物などを混ぜた物で，村の近くの小規模の工場で作られているとの説明もあり，このことから，農民の配合飼料に対する関心が少ない事が伺えます。この配合飼料は一袋 345 バーツで，日に 2 袋，だいたい一日一頭当たり 3~4 キロ与えているそうです。一方，草地の方はルジーグラスが主体の草地で，雑草の進入はあまりなく，有用植物で占められているようですが，マメ科とイネ科の混播は行われていないようです。熱帯草地でのマメ科の利用はあまり意識されておらず，配合飼料でまかなうといった印象でした。この草地は気候にもよりますが大体 3 週間に 1 回の頻度で刈り取りが行われ，熱帯牧草特有の生育の早さで，あまり広くない土地でもかなりの植物体量を確保出来る様です。この草は牛に与えられていて，すべて刈り取った物を与えており，共用区域の放牧を含めた一切の放牧は行われていないとの事でした。また乾期ではやはり牧草の生育は止まってしまうので，その時は稲わらを与えているようです。

酪農家での質問を終え，次に村内にあるごみ集積所へ向かいました。ここの集積所では人の手でプラスチックやアルミの分別や回収を行なっていて，村の人々の雇用の場として大きな役割を担っています。実際に集積所に行ってみるとごみがひたすら積まれており，蒸しかえす天気はかなりきついにおいでした。この集積所のすぐ横に住んでいる人々がいて，その人たちに健康被害はないのかととても気になりました。村長さんの話では，現在ごみ処理場の近くに発電所の設置が検討されていて，ごみ処理により発電しようという計画です。村の多くの人々が働いているだけに，労働環境やごみの処理方法が改善されることを願うばかりです。



ごみの集積所

12 時に村を出発し，1 時間ほど移動して次に塩害土壌の水田での稲作に関する研究プロジェクトを見学しました。ここの一部はコンケン大学の実験圃場で，香り米や早稲など様々な品種が栽培され塩害土壌への適応性の実験が行われていました。塩害土壌では塩が浮き上がり土壌表面が白くなっているところが見てとれました。これは蒸発や冠水を繰り返すことで土壌中の塩分が浮きでてきてしまうためであるそうです。ある区画では完全に塩におおわれてしまっていて，そこではもう栽培ができないといそうです。水田の周りにはため池も数多くあり，塩害が顕著なのはごく一部で，想像していたより米が豊かに育っているように見えました。水田をあとにして，14 時に遅めの昼食となりました。昼食後にコンケン大学の方々とはお別れして私たちはバンコクへ戻る経由地点であるパクチョンへと向かいました。コンケン大学の方々には行く先々で説明をしていただいたりタイ語を通訳してもらったりと大変お世話になりました。ホテルに着いたのは 20 時前で，夕食をとり今日も長い一日が終わりました。